

# 博士學位論文審査要旨

2011年1月30日

論文題目： ヴォーリズ思想と事業  
—ヴォーリズ住宅に込められたミッション—

学位申請者： 大橋 二郎

審査委員：

主 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 アンヌ・ゴノン

副 査： 文学研究科 教授 庭田 茂吉

副 査： 神学研究科 教授 石川 立

要 旨：

『ヴォーリズ思想と事業—ヴォーリズ住宅に込められたミッション—』という博士論文において大橋二郎は20世紀初頭米国からキリスト教の伝導のために日本に来たヴォーリズという若い男性を研究対象にしている。ヴォーリズは約60年間日本に住み、帰化し、戦後天皇制を維持するためにGHQに訴えて、1964年に日本で亡くなり、並外れた人生をきたた人であった。

大橋氏はヴォーリズが建築家の資格を保持していないにも拘らず学校、病院やデパート、また住宅などの建造物の設計に携わったことを説明するため三つの要因を挙げており、博士論文の構成はその三つの要因からなっている。第一章において大橋氏はヴォーリズにとっての宗教の意味を明確にする。まずヴォーリズは信仰が深い家庭で育ち、その家庭において勤勉さ、儉約などのプロテスタント的な価値を取得した。その宗教的な精神を持っているヴォーリズはYMCAの派遣を受けて、日本へ行き滋賀県で伝導をすることを決心した。第二章においてヴォーリズの「ミッション」を可能にしたのは、大正時代に起きた社会的変化であるということが挙げられている。経済的な発展の中で、社会の近代化が進んでおり、新しい社会階層が登場する。その俸給生活者は消費社会に惹かれて、特にもっと便利な住宅を希望しているという。女性の社会的位置も改善され、主婦の世界が雑誌や運動によって変わり始める。大橋氏はその変化を奨励した社会的運動を取り上げて、特に直接に建築という自分の課題に関わっている住宅改良運動を分析する。第三章においてヴォーリズは自分自身が帯びているミッション、つまり「神の国」の実現はどのような計画だったか、その観点が論じられている。「Christian Home」の建設をめざすことによってヴォーリズは自分の深い信仰と彼の建築に対する関心をあわせて表現できるようになった。そのChristian Homeの設計の中で、太陽の日差し、清潔さの重要性などの彼の理想を具体化することができた。しかもヴォーリズはそのような設計事務所の運営に必要な資金を得るためMentholetumという米国の医療会社の日本店を開いて経営するまで自分のミッションに精力を注いだ。

大橋氏はヴォーリズの軌跡をたどるために大正期の社会運動を含める膨大な文献を丹念に分析している。しかし唯一遺憾な点は、それをより批判的に読み上げることで多くの問題点を抽出できたはずであった。その点は氏の今後の研究の深化を待つこととし、それでもなお、氏がヴォーリズ研究の新しい方向を推進したことを高く評価するものである。よって、本論文は、博士（ヒューマン・セキュリティ）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

## 総合試験結果の要旨

2011年1月30日

論文題目： ヴォーリズ思想と事業  
ーヴォーリズ住宅に込められたミッションー

学位申請者： 大橋 二郎

審査委員：

主査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 アンヌ・ゴノン

副査： 文学研究科 教授 庭田 茂吉

副査： 神学研究科 教授 石川 立

要 旨：

大橋氏の学位申請論文について、2011年1月22日10時40分から11時40分まで、公聴会方式により口頭試問を実施した。まず、大橋氏自身から30分にわたって論文の概要についてのプレゼンテーションを行ってもらい、その後30分間、大橋氏と審査委員との間で質疑応答を行った。

審査委員からは、まず、論文中に使用されている用語、概念について理解の確認があったが、大橋氏はいずれに対しても明確かつ正確に説明をしていた。また、内容面での弱点や疑問点についての質問に対しても、今後の研究課題を示した上で審査委員を納得させる回答をしていた。以上のことから、大橋氏の十分な研究能力を確認することができた。

また、外国語能力については、ヴォーリズに関する米国での調査実施とヴォーリズ自身が英語で書いた自伝や作品などの文献研究の検討において、数多い英語文献・資料を参照・引用しており、その理解や引用においても誤りがないことを確認した。したがって、研究に必要な外国語(英語)能力は十分であると判断した。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

## 博士學位論文要旨

論文題目：ヴォーリズ思想と事業 ―ヴォーリズ住宅に込められたミッション―  
氏名：大橋 二郎

### 要 旨：

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ(William Merrell Vories:1880-1964)が滋賀県立商業学校の英語教師として米国より着任したのは1905年(明治38年)であり、2年間の教員生活を経て1908年(明治41年)より建築業務に携わった。1910年(明治43年)ヴォーリズは「近江ミッション」というキリスト教伝道団を組織し、メンバーたちと「ヴォーリズ合名会社」を設立し本格的な設計活動に入った。ヴォーリズは明治末期から第二次世界大戦終結の1945年(昭和20年)まで、約35年間に日本を中心としアジア全体で1500近い建築設計を行い、その内、約500棟の住宅設計に携わった。またヴォーリズは近江を中心として、ガリラヤ丸などのミッション・シップを最大限に活用し、キリスト教の布教に努め建築だけに留まることなく医療、福祉、厚生、教育と多方面にわたって日本の生活改善に心血を注ぎ、戦後においては天皇戦犯問題にも深く関わったという歴史的経緯がある。そのように多くの影響を日本に与えたヴォーリズであるが、その功績は日本の近現代史はおろか日本建築史においても、これまで大きく取り扱われてこなかった。近年ヴォーリズが注目されるようになった要因のひとつに「豊郷小学校建て替え問題」があり、この問題は我々にヴォーリズが残した様々な建造物や文化遺産について多くの問題意識を提起し、その総括から豊郷小学校を後世に残すことの必要性が認識されたといえる。そのような現状を認識し、筆者はヴォーリズが日本に於いて一体どのようなことを成そうとしていたのか、遂行を試みたミッションというものを明らかにしておくことが重要であると考え。ヴォーリズ建築事務所を含め彼の組織した団体「近江ミッション」を率いるチーム・ディレクターとして遂行を試みた住宅設計理念を考察した時、彼の思想が読み取れる。本年度2010年は彼が「近江ミッション」を立ち上げ、本格的な建築活動に入ってから100年目にあたり、この期に彼のミッションについて検証しておくことが重要であり、そのことがヴォーリズ建築における現代的評価に至ると認識する。それらはヴォーリズ建築保存の重要性に繋がり、保存活動が促進されることにより新たな発見が生れ、今後の研究に寄与するところが多大であるといえるからである。

本論文は大きく序論、本論、結論の3部から構成されており、本論も3つの章から構成されている。結論ではヴォーリズが日本に於いて展開した住宅設計の活動の中にどのような思想が盛り込まれていたのかを論究することになり、それを導く本論の3つの章もそれぞれ3つの節から成立し結論を導くための要素を成している。

具体的に述べると、第 I 章に於いては「ヴォーリズの宗教」について論じている。ヴォーリズの住宅にはプロテスタンティズムに裏打ちされた奉仕の精神が包含されているといわれるが、その宗教性とは如何なるもので、なぜそのように語られるのかということについて考察を深めた。第 1 節「先祖と家系」では彼の思想形成に大きく関与している家庭環境や成育歴、先祖からの家系に起因している宗教的土壌をヴォーリズが執筆した自叙伝を手掛かりに論文筆者自身が現地調査したレポートに基づき彼の神学的思想の本質に迫った。ヴォーリズは自叙伝の中で、自分の中にオランダ人、イギリス人、フランス人の血統があり「先祖は 16 世紀のフランス、ユグノーに遡ることができる」と述べている。それら先祖からの宗教的土壌との繋がりも含め成育歴と彼の生涯において造り続けた住宅設計とが大きく関係している事を検証する為にこの節は大きな役割を成している。第 2 節「宗教と召命体験」では、ヴォーリズ自身が携わった YMCA 活動を中心に彼自ら、どのような宗教思想を体得していったかということについての考察をすすめた。特に、ここでは彼の「召命体験」について取り上げ、その出来事が来日の大きな要素となったことを論じた。第 3 節「ヴォーリズと同志社」では、ヴォーリズが来日し、同志社と深く関わり合っていた経緯を宗教的な観点から考察し、その深い宗教的繋がりによって同志社学舎建築に携わった経緯について論じた。ヴォーリズの住宅思想を論じる上に於いて、以上第 I 章で述べた彼のプロテスタンティズムにおける宗教的背景を理解しない限り、ヴォーリズの住宅については語れず、彼が生涯、造り続けた住宅の設計理念を知るためにはヴォーリズの宗教性を理解しなければならぬといえる。

第 II 章「ヴォーリズの住宅」に於いては、ヴォーリズの考えた住宅が日本において如何にして受容されたかという要因を日本の置かれた社会背景を含めた視点で論じた。ヴォーリズの言葉に「建築は社会の器（うつわ）である」と述べたものがある。ヴォーリズの理想とする住宅はクリスチャン・ホームを前提とした「居間中心型住宅」であったが、ヴォーリズの住宅理念なるものが明治後期から日本人に突然のごとく受容され日本中に伝播し、第二次世界大戦終結までの約 35 年間に 600 棟近くも建設されたとは凡そ考え難く、それには明治の終わりまでに、少なくとも日本に於いてヴォーリズ思想や彼の建築理念を受け入れるだけの文化的土壌が成熟していたと考えるべきであり、その受容時期であった大正期とヴォーリズが理想とする住宅なるものが呼応し一挙に普及したと考察できる。第 1 節「ヴォーリズの来日と西洋式住宅」では明治期を中心に当時の日本社会に焦点をあて、日本が必要としていた住宅というものを捉えてみた。1898 年（明治 31 年）に作家、幸田露伴が既に「家屋」という論文を発表し、都市人口の一部に新しい社会階層として生れた俸給生活者の安住生活を支えるには職住が分離した安息専用の住宅が必要であると説いている。その後来日したヴォーリズの住宅造りが、その時代性に則していたことについて論じた。第 2 節「ヴォーリズと田園都市」では前節とも大きく関わり、俸給生活者の出現と

共に多くの社会構造の変革がもたらされ、住宅改革が声高に叫ばれた。そのような時、ヴォーリズは住宅改善運動に関わった橋口信助と出会い、住宅改良会の建築誌『住宅』にヴォーリズの作品が掲載され、それを期に住宅改善に関係していく経緯について論じた。またヴォーリズが軽井沢に於いて多くの人脈作りに成功し様々な建築設計が日本で可能になっていった背景を分析した。第3節「ヴォーリズと住宅改善運動」では彼の掲げた2つの住宅改革の提案について論じた。即ち、ヴォーリズの理想とした「居間中心型洋風住宅」は大正時代に日本で飛躍的に受容されたが、その要因として大きく2つの要素が考えられた。一つは都市における住宅改革。もう一つは「二重生活からの脱却」という住宅改革であった事を取り上げ、ここでは2つの改革の中でヴォーリズがどのように、それらと関わっていったかを述べた。ヴォーリズの住宅が急速的に受容された要因に多くの社会的背景が存在したことを理解しなければならず、ヴォーリズは社会改良の一環として住宅づくりのミッションに取り組んだ事をここでは考察し論じている。

第Ⅲ章「ヴォーリズのミッション」ではヴォーリズが近江で取り組んだ「神の国」を中心に取上げた。ヴォーリズが日本で取り組んだミッションのいわゆる凝縮されたものが彼の近江での活動であったといえる。近江での彼の「神の国」造りは彼の神学思想をより具体的に可視化したものであったといえる。第Ⅰ章の宗教を中心とした論考、第Ⅱ章の住宅を中心とした論考を結論に導くためには不可欠な章であり、彼の成そうとしていたミッションの具体像が窺える章である。第1節「ヴォーリズと経済活動」においては近江ミッションで展開したヴォーリズ独特のユニークな経営理念、経営思想に就いて述べ、それらがどのように培われていったのかを考察した。第2節「ヴォーリズと医療・健康」では近江ミッションで展開された医療及び教育事業について論じた。特に「神の国」建設に於いてヴォーリズはYMCAの「霊性、知識、身体」の全人的な教えに相当する「宗教、教育、医療」に関する事業は欠かせないと考え、ミッションに必要な医療施設となる「近江療養院」の経営を展開した。とりわけ「近江療養院」の建築には彼の住宅理念やプロテスタンティズムに基づく奉仕精神が内在し、彼の住宅づくりの原点となっていることを述べた。第3節「近江ミッション住宅」では、ヴォーリズの理想とする住宅モデルがこの近江ミッション住宅であったと論じている。それはクリスチャン・ホームを念頭に置いた「居間中心型住宅」といえるもので、そこには家族団欒の為のスペースとなる居間が設けられ、家の中で一番陽あたりが良く、採光が存分に取り入れられ、日光消毒により疾病に対する衛生対策が施されている住宅であった。そして必要に応じた場合を除いて「中廊下型住宅」にみられる廊下部分は設けず、家族が憩えるオープン・スペースとして、廊下を有効利用できる住宅であることを述べた。

結論の章「おわりに」では1923年に出版されたヴォーリズの著書『吾家の設計』と翌年出版された『吾家の設備』を取り上げ、著作に明記されたように彼の住宅設計は1. 生命の保護及び安全のため。2. 安楽。3. 個性の発展、或は家庭の秩序を正しくする。4. 健康。5. 人種の発展。

の五大要素に基づいていることに触れ、この要素を含んだ住宅がヴォーリズ住宅の理念を集約させたものといえたと述べた。これら五大要素は「建築は社会の器（うつわ）である」というヴォーリズが設計者として念頭においた重要なものであり、彼は使いやすく、機能的で安全性の高い「住い」という「器」を人々に供給することこそが「神から信託されたミッションである」と考えたという本論文の論究に達したのである。